

学生の生徒指導力を高める授業改善に関する実践研究

——ファシリテーションの手法を活用した授業を手がかりとして——

田村 徳至・神谷 真由美（信州大学学術研究院 総合人間科学系 講師）

1 はじめに

教師の生徒に対する体罰はいかなる理由があろうとも禁止されている。しかし、生徒に対する教員の不祥事（対生徒暴行など）は後を絶たない。教師も人間である以上、生徒の態度如何によって感情を抑えられない時があるかもしれないが、教師という立場と自覚を持ち、心を平静に保つ必要がある。

また、学校・学級には様々な家庭環境・地域環境で育った児童生徒が存在する。教師は多様な価値観を持つ児童生徒とその保護者に対して平等に接しなければならない。このことに関しても、全ての教師が公正・公平に児童生徒に接しているとは限らない。特に、教育現場での経験が教育実習程度しかない新採用教員では尚更のことである。

そこで、教職課程を履修している専門学部生の生徒指導能力（教育実習時をはじめ、正規教職員となった後にも児童生徒に対してできる限り公平・公正に接し、子どもたちの自己指導能力を育む力）を向上させる必要がある。

田中は、授業にグループ学習・班学習などを取り入れることは、グループのリーダーを決めたりする活動を当然含むことになる。教師が上手にこのような活動を推進させることは、生徒指導の課題である”人間関係の改善と望ましい人間関係の促進”や”共感的人間関係の育成につながると述べている¹。

学校は、児童生徒たちが授業や課外活動などを通して、自ら学ぶ意欲を持ちながら他者と有意義に触れ合うことを通して、心身ともに健全な成長をしていく場である。そのために教師は、児童生徒たちが安心・安全で学級内・学校内において自分の居場所がある支持的風土をもつ学級をつくるのが何よりも重要である。七條は「学級は子どもたちの学校生活と学習の基礎集団であるとともに、生徒指導の基本的な実践フィールドである」と述べている²。生徒指導を進める上で、その基盤となる学級経営の意義について「生徒指導提要」では、「学校における児童生徒の人間関係ないし成長発達は、その多くが学級・ホームルームを場とする生活の中で行われる」とした上で、「学校経営の基本方針の下に、学級・ホームルームを単位として展開される様々な教育活動の成果が上がるよう諸条件を整備し、運営していくことが、学級経営・ホームルーム経営と言われるものである³」としている。

まず、小学校は学級担任制である。そのため、学級担任は、朝学活から給食・午後の授

業・終学活後まで自分の担当するクラスの子どもと基本的に常に一緒である。そのため、中学校・高等学校教員と比較すると児童の問題行動や子どもの変化などに気づきやすい。学級（ホームルーム）担任教師は、通常は学級（ホームルーム）活動や特別活動を通して、学校全体の生徒指導・進路指導の目的・方針をしっかりと受け止め、そのもとで生徒指導主事・進路指導主事の指導・助言を受けて、指導に当たることになる⁴。

また、児童生徒の問題行動の早期発見について「生徒指導提要」では、「問題行動の早期発見は、児童生徒理解を着実に進めるということにほかならない」とした上で、「客観的な観察を心がけるとともに、複数の教員で観察を行う必要がある⁵」としている。生徒指導は学級担任だけではなく学校全職員の協力体制と家庭との連携が不可欠である。本稿は、教職課程履修学生にとって必修2単位科目である「生徒指導の理論と実践」の授業において学生の生徒指導力を向上させるために、ファシリテーション^{*1}の手法の一つであるワールド・カフェ^{*2}の手法を活用した授業実践研究である。

2 研究の目的

本研究の目的は、大学の教職課程の授業の一つである「生徒指導の理論と実践」の授業において、ファシリテーションの手法を活用した授業（ワールド・カフェ）が学生の生徒指導力を高める一つの手段として有効に作用することを実証することである。

3 研究方法

（1）対象学生と実施時期

平成26年12月の第11回目の授業において、繊維学部生（16名）・農学部生（22名）の高年次生（2～3年生）を対象に実施した。

（2）使用資料

雑誌「知致」2005年12月号 「縁を生かす」

資料の全文については、資料頁に掲載。

（3）学生の意識変化と生徒指導に関する考え方の向上について

授業後に考えたことや感想などをワークシートに記入させた。学習に対する意識の変化の度合いなどは4点法で実施した。得られた数値を $i \times j$ の χ^2 検定を行い、有意差を検討した。

4 指導案（90分×1コマ）

前時（第10回）

前時の終了時に次時の学習内容について連絡する。あらかじめ課題を提示することで学生に学習意欲をもたせる。

課題：「生徒指導」という言葉でどのようなことをイメージするか考える。

自分にとって生徒指導とは何か考える。

本時（第 11 回）

ねらい：生徒指導は教師個人で行うのではなく、学校（チーム）として活動することが重要であることを理解し、教諭としてどのように行動すべきかであるか考えることができる。

T：教師の発問 S：学生の予想される回答 ・学習活動

	教師の発問・学生の学習活動	留意点
導入 (5分)	<p>S：前時で自分にとって「生徒指導」という言葉でイメージすることを発表する。</p> <p>S 1：体育の先生が出てきて、朝会時に注意する。</p> <p>S 2：取り締まり。決まりを守らせる。</p> <p>S 3：何か悪いことをした生徒を相談室に呼んで説教する。</p> <p>T：生徒指導の目的・本来の定義を説明する 「誰が何を指導するのか」「誰が何を育成するのか」「誰が何を支援するのか」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の自由な発言をうながす。 ・他者が何を述べても否定しない。 ・ネガティブな内容が中心になると考えられるが、ポジティブな考えも引き出す。教師とのよき思い出なども思い出させる。
展開 (80分)	<p>○個人活動とペア活動</p> <p>T：「資料：知致より“縁を生かす”」の音声CDを流す。（約5分）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・素直な気持ちでこの担任の先生のよいところなどを記述する。 ・傾聴の姿勢できき合う。
展開1 (15分)	<p>T：このドキュメンタリーを聞いて、感動したところ、良かったところをワークシートに記入させる。3分以内で5つ以上記述する。</p> <p>T：ペアになって自分の考えをシェアリングさせる。1人2分ずつ。</p> <p>S：この先生の行動力はすごい。自分にできるかどうかわからない。</p> <p>S：一人の教師の行動が、子どもの一生を左右するなんて恐ろしいと同時にやりがいを感じるなど。</p> <p>T：いくつかのペアの代表者にどのような考えが出たか聞く。（考えを全体で共有する）</p>	
展開2 (5分)	<p>T：このドキュメンタリーの内容で考えられる指導上の課題、問題点を書きなさい。（5分以内で</p>	

<p>展開3 (15分)</p>	<p>3つ以上目標) S：子どもを先入観でみていた（判断していた）。 S：指導要録を見るのが遅すぎる。 S：学校全体としての生徒指導体制は機能していたのか疑問。 S：放課後の学習はクラス全体に声をかけたのか、それともこの児童だけなのか（もしこの児童だけであるならひいきであると思う）。など</p> <p>◎ワールド・カフェの手法を行う</p> <p><ラウンド1> この課題について拡散的に思考し交流する T：1回目の4人グループを作らせる。 リーダー、タイムキーパー、記録係、フロントランナーを決めて、自分が考えた内容を発表する。 *指示事項 ①できるだけ多くの課題を出す。ポジティブな問題点を出させる。 ②各グループで最低5つ以上の課題を出してまとめていく。 ③課題には必ずタイトルをつける。</p>	<p>うに促す。</p>
<p>展開4 (15分)</p>	<p><ラウンド2> グループを入れ替えて拡散した思考を整理する。 ・4人のうちリーダー役の1人を残し（テーブル・ホスト）、他の3人はそれぞれ違うグループに移動する。 ・テーブル・ホストはラウンド1でどのような話し合いが行われたのか説明する。 ・他の3人もそれぞれ、前のグループで話された内容を報告する。 ・4人での話し合いの中で提案された内容を各自が模造紙に書き足していく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループに模造紙1枚、76mm×127mmの付箋紙、6~8色程度のマジック1セットを準備しておく。 ・15分の時間設定をしたが、学生の様子を見ながら時間を決める。 ・良い面を認めつつ、もっとこのようにしていたら良かった。というようなポジティブな思考が重要。 ・移動先に同じグループだった人がいないように配慮する。 ・できるだけ考えが広がるようにする。 ・ここでの内容が収束に向かうラウンド3につながる。 ・遠慮せずに、書き込ませる。
<p>展開5 (15分)</p>	<p><ラウンド3> ・元のグループに戻り、収束を目指して交流することにより、何らかの提案（自分ならこのように行動するなど）をつくる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教師・学校と生徒・保護者がそれぞれ win-win になる提案を考える。

<p>展開 6 (15分)</p>	<p>T:これまで、このドキュメンタリーの内容でポジティブな観点から成果と問題点を話し合ってきました。それらを踏まえて、よりよい生徒指導をするための3つの提案を作成してください。</p> <p>S:テーブル・ホストが最初にラウンド2の報告を行い、次に戻ってきた3人がそれぞれの内容を報告する。それを踏まえて3つの提案を考えていく。</p> <p><ハーベスト(ラウンド4)収穫> 各グループの提案を全体で共有する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・机の上に置いた模造紙を4人で感想を述べ合いながら、他のグループの模造紙と画用紙にまとめられた3つの提案を見て回る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・15分後にすぐに終了の宣告をするのではなく、やわらかな言い方で自然に話し合いが終了するようにする。 ・時間があれば、各グループが3分程度で発表する形式をとる。 ・時間が不足していたら、各自が他のグループの模造紙などを見て回る。
<p>まとめ (5分)</p>	<p>S:本時の学習で参考になったこと、感じたこと、他者との交流で考えたことなどを記述する。</p> <p>S:来年度(再来年度)で行う、教育実習の抱負を含めて記述する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・単純にこの担任の先生の行動を批判するのではなく、学校全体で取り組む必要があることを理解させるようにする。

5 学習指導の効果・学生の意欲に関して

①ファシリテーションの手法(ワールド・カフェ)を活用した授業を受けての変化

表1:生徒指導に関する考える力が高まったと実感できたかどうか。

	かなり高まる	ある程度高まる	あまり高まらない	高まらない
講義形式	0 (0%) ▽**	15 (39%) ns	20 (53%) ▲**	3 (8%) ns
ファシリテーション	18 (29%) ▲**	17 (37%) ns	2 (5%) ▽**	1 (3%) ns

表中の数値は左側が人数、()がパーセント、▽は有意に少ない、▲は有意に多い

**は1%水準で有意 N=38

講義形式の授業とファシリテーションの手法を活用した授業において、生徒指導に関する考える力が高まる(高まった)と実感したかどうかについての度合いのクロス集計を χ^2 検定したところ、「かなり高まる」「あまり高まらない」はそれぞれ1%水準で有意差が認められた。しかし、「ある程度高まる」「高まらない」については、有意差は認められなかった。学生の変化を見ると、講義形式の授業で「高まらない」と回答した3人はファシリテーションを活用した授業では、「あまり高まらない」に2人移動したが、「高まらな

い」に止まった学生が1人であった。講義形式で「あまり高まらない」と回答した学生20人の内、「かなり高まる」に5人、「ある程度高まる」に15人移動した。講義形式の授業、ファシリテーションの手法を活用した授業での実感度においてそれぞれ変化しなかった学生も若干いた。しかし、90%以上の学生が「実感した」ことについて上位の項目に移動したことから、ファシリテーションの手法を活用した授業は学生の生徒指導に関してある程度考える力の向上について有効に作用したと考える。

②学習意欲の変化

表2：授業開始前と学習終了後における学習意欲に関して

	意欲あり	やや意欲あり	あまり意欲なし	意欲なし
学習開始前	4 (11%) ▽**	19 (50%) ns	12 (31%) ▲**	3 (8%) +
学習終了後	25 (66%) ▲**	10 (26%) ns	3 (8%) ▽**	0 (0%) +

表中の数値は左側が人数、() がパーセント、▽は有意に少ない、▲は有意に多い

**は1%水準で有意 +は10%水準で有意傾向 N=38

学習開始前の学習意欲と学習終了後の今後5回の授業に対する学習意欲についての度合いのクロス集計を χ^2 検定したところ、「意欲あり」「あまり意欲なし」はそれぞれ1%水準で有意差が認められた。しかし、「やや意欲あり」「意欲なし」については、有意差は認められなかった。学生の変化としては、学習開始前「意欲なし」の3人は学習後では「あまり意欲なし」に、開始前「あまり意欲なし」と回答した12人の内、「意欲あり」に5人、「やや意欲あり」に7人移動した。開始前「やや意欲あり」と回答した19人は、終了後「意欲あり」に17人移動したが、変化なしが2人であった。当初、「意欲あり」と回答した4人は、終了後「意欲あり」に3人であるが、「やや意欲あり」に降格した学生が1人であった。意欲が低下した1人の学生に追跡調査をしたところ、もともとグループワークが苦手であり、他者との意見交流が思うようにはかどらなかったことがわかった。学習意欲の変化の度合いにおいても90%以上の学生が、今後の意欲が向上したと回答していることから、ファシリテーションの手法を活用した本研究授業は、学生の学習意欲を向上させることに有効に作用したと考える。

6 学生の感想・意見

- ・いろいろな課題を発見することができた。しかし、この担任の先生の行動は一言でいうとすごいと思う。はたして自分がここまでできるかどうか疑問である。問題があるといっても、この先生の行動が主人公の少年の心を動かしたということは間違いない。感動するところは素直に感動した。自分が教師になったらこの担任の先生のような行動を学校全体として取り組むことができればよいと思った。(繊維：男子)

- ・グループワークを通じて、生徒指導は物事を1つの視点だけから判断してはいけないと改めて実感することができた。やはり一人一人の生徒には事情があるし、好き嫌いなど主観で判断してはいけないと思う。教師1人が”よい”と判断してとった行動が、他者からみると間違っていたり、ひいきに感じたりまた、親御さんからも様々な反応があると思う。このようなことを防ぐために、1人ではなく他の先生に相談することが必要である。早期に対応していたら父親からの暴力を防ぐことができたかもしれない。(農：女子)
- ・この話は2回目でした。他の先生から最初にこのお話を聞いたときは「なんていい話なんだ」と感動しただけで終わりましたが、今回の授業ではあえて別の視点から見たことによってさまざまな課題があることがわかった。教師は考えることが多くて大変だ。でも結婚式に呼ばれるのは嬉しいと思う。私もこの先生のように教え子から結婚式に呼ばれるような教師になりたい。(農：女子)
- ・本時において、教師に求められる能力として2つあることがわかった。1つ目は、頭の柔軟さ(思考の速さ)である。教育の現場はリアルタイムで刻々と状況が変化している。その時々に応じて対応していかなければならない。冷静に全体を俯瞰し、平常心を持って生徒との対話をしていきたい。2つ目は、教師は生徒一人一人について深く理解すべきであるということだ。「縁を生かす」は素晴らしい指導の事例ではあるが、特定の生徒にのみ注力すれば良いというものではない。他教員と連携、時には学校以外の機関としも連携を図りながら指導していく必要がある。素晴らしい実践(子どもとの交流)をしたこの先生の子どもに対する愛情や情熱を自分も参考にしたいと思う。(農：男子)
- ・この先生は特定の子どもに深入りしたと思う。しかし、深入りはいけないことなのか……。この子どもに深入りしたからといって、他の子どもを放ったらかしにしたということではないと思う(1人の子どもにここまでできる先生だから、おそらく学級経営は素晴らしく授業も面白くて興味が沸く授業をされると思う)。(繊維：女子)
- ・長所も短所もある事例だと思う。他者との意見交流をしてわずか14~5人であっても多様な見方・考え方があったことがわかった。農学部生の考えを知りたい。(繊維：男子)
- ・感動的な話ではあったが、教師としてどこまでが許されるのかよく考えさせられる話だったと思いました。(繊維：男子)
- ・この話を聞いて、そして他者とのグループワークを通じて、先入観の恐ろしさと同時に生徒を見かけや周りの評価で判断することの危うさを感じました。しっかりと足を使って生徒を知ることが大切だと改めて感じました。(繊維：男子)
- ・高校までの授業で、話し合い活動なるものはあったが、ここまで本格的な話し合い活動は初めてだった。自分の考えをまとめてから他者との3段階にわたる交流で自分の考えの深まりが実感できたし、他者の考え(視点が違う)ことを知ることができた。自分も教師になったら、機会があればファシリテーションの手法を使った授業を行いたい。(織

維：男子)

- ・ファシリテーションの手法を活用した授業は、前期の教育方法論に続き2回目でした。いつも私には考えもしない意見が友達から聞くことができ、新鮮です。将来、教師になったらさまざまなファシリテーションの手法を活用した授業を行いたいと思いました。

(農：女子)

- ・今回の授業は最初から自分で考えた後、ラウンド1から他人との話し合いが3回行われた。ラウンドを重ねるごとに自分の考えがまとまると同時に、生徒指導のイメージが浮かんでくることが実感できた。自分が「いい」と考えたことが、他者から見ると「問題点」と考えられていることがあった。このような話し合いの手法は大変興味深いので自分でも勉強してみたい。学習だけでなく、サークル活動でも使えそうだ。(農：男子)

7 本研究の成果と課題

これまでも「教育方法論」「特別活動の理論と実践」の授業においてもファシリテーションの手法を活用した講義(授業)を実践してきた。今回は生徒指導の理論と実践の授業において、実際にあったある学級担任と児童の例を取り上げて、その内容に関して成果と課題をファシリテーションの手法(今回はワールド・カフェ)を活用した授業を展開した。

講義形式の授業でも学生はある程度のこと考えられるが、他者との話し合いを繰り返すことにより自分の考えをまとめることができる。さらに、自分では気づかなかった視点や自分の考えとは相反する意見を知ることができるなど利点が多い。今回も学生からの意見・感想からそのことが伺える。

しかし、本研究授業の課題としては、90%以上の学生が学習意欲などよい方向に変化しているが、10%の学生は変化がないか降格していることを踏まえると、事前に学生の特性を把握しておく必要がある。グループワークよりも1人での学習(講義)形式を好む学生の存在を忘れることなく更なる授業改善と教材開発の必要性を実感した。これを次年度の授業改善に役立てたい。

<註>

*1 ファシリテーションとは、元々は「促進する」「助長する」「(事を)容易にする」「楽にする」という意味の英語「ファシリテート」(facilitate)の名詞形である。人が集まって何かをしようとする時、どうしたらお互いを活かし合い、創造的な成果に結びつける技法のことである。

*2 ワールド・カフェとは、ファシリテーションの手法の一つであり、参加者の拡散思考と収束思考をともに成立させることをねらった、4人グループを基本とする交流活動のことである。

<参考文献>

- 1 田中将之、「授業改善を通しての生徒指導の実践」『生徒指導研究第6号』、日本生徒指導学会機関誌、2007、PP.48-56
- 2 七條正典、『生徒指導学研究第11号』日本生徒指導学会編、学事出版、2012年、P.6
- 3 『生徒指導提要』第6章 生徒指導の進め方、文部科学省、2012、PP.138-139
- 4 吉田辰雄編著、「最新 生徒指導・進路指導論」第5章生徒指導・進路指導の組織と運営、2009年、P.109
- 5 『生徒指導提要』第6章 生徒指導の進め方、文部科学省、2012、P.155

<資料>

「縁を生かす」

ある小学校で、いいクラスをつくらうと一生懸命な先生がいた。
その先生が5年生の担任になった時、一人、服装が不潔でだらしなく、
居眠りをしたり、遅刻をしたり、
みんなが手を挙げて発表する中でも、一度も手を挙げない少年がいた。

先生はどうしてもその少年を好きになれず、
いつからかその少年を毛嫌いするようになった。
中間記録に、少年の悪いところばかりを記入するようになっていた。
ある日、ふと目に留まった・・・

1年生の記録、「朗らかで、友達が好きで、人に親切。勉強もよくでき、将来が楽しみ。」

先生の心のつぶやき・・・

『きっと間違いだ・・・他の子の記録に違いない』

2年生の記録

「母親が病気で世話をしなければならず、時々遅刻する」

3年生の記録

「母親の病気が悪化。疲れていて教室で居眠りをする」

「母親、死亡。希望を失い、悲しんでいる」

4年生の記録

「父は生きる意欲を失い、アルコール依存症となり、子どもに暴力をふるう」

先生の胸に激しい痛みが走った。

「ダメ」と決めつけていた子どもが突然、深い悲しみを生き抜いている生身の人間として自分の前に現れた。

先生にとって目を開かれた瞬間であった。

放課後、先生は少年に声をかけた。

『先生は放課後教室で仕事をするから、あなたも勉強していかない？

分からないところは教えてあげるから』

少年は初めて笑顔を見せた。

それから毎日、少年は教室の自分の机で予復習を熱心に続けた。

ある日・・・

授業中、少年が初めて手をあげた時、先生に大きな喜びが沸き起こった。

少年は自信を持ち始めていた。
少年にとっては、大きな自信。先生にとっては、大きな喜び。
クリスマスの日の午後だった。
少年が小さな包みを先生の胸に押しつけてきた。
少年からのプレゼント・・・

後で開けてみると、香水の瓶だった。
『これはきっと、亡くなったお母さんが使っていたものに違いない・・・』
先生はその一滴をつけて、夕暮れ時に少年の家を訪問した。
少年は、雑然とした部屋で一人、本を読んでいた。
少年は気がつくやうに飛んできて、先生の胸に顔を埋めて叫んだ。
「ああ、お母さんの匂い！今日は素敵なクリスマスだ！」

少年が6年生のとき。先生は少年の担任ではなくなった。
少年が卒業の時、先生に1枚のカードが届いた。
「先生は僕のお母さんのようです。そして、今まで出会った中で一番すばらしい先生でした。」
それから6年。またカードが届いた。
「明日は高校の卒業式です。僕は5年生で先生に担任してもらって、とても幸せでした。おかげで奨学金をもらって、医学部に進学できます。」
それから10年。またカードが来た。
そこには、「先生と出会えた事への感謝と父親に叩かれた経験があるから患者の痛みが分かる医者になれる」と記されていて、最後にこう締めくくられていた。
「僕は、よく5年生の時の先生を思い出します。
あのままだめになってしまう僕を救ってくださった先生を、神様のように感じます。
大人になり、医者になった僕にとって最高の先生は、5年生の時に担任してくださった先生です。」
そして1年、またカードが届いた
それは、結婚式の招待状。そこにはたった一行、書き添えてあった。
「母の席に座ってください」
先生は嬉しくて涙が止まらなかった・・・

月刊誌『致知』2005年 12月号より
*一部、田村が加除